

新たな視点から、子どもの追求を深める ICTを活用した授業

～子どもの追求を問い直す教師のかかわり～

札幌市立立緑が丘小学校

〒064-0810
北海道札幌市中央区南10条西22丁目3-1

<http://www.midorigaoka-e.sapporo-c.ed.jp/>

1. はじめに

本校は、12の教科・領域（外国語活動を含む）ごとに部会を組織し研究に取り組んでいる。「本気で学ぶ子ども」という研究主題のもと、問題解決的な学習を重視した研究を進めてきた。併せて、デジタル教材や実物投影機を教室に持ち込むなど、ICTの効果的な活用にも積極的に取り組んでいる。なぜならICTの活用は、子どもの興味・関心の喚起、問題意識の醸成、実感的な学びにつながる、重要な指導技術の一つだからである。ICT活用のプラスとマイナスの両面を見極めながら、子どもの実態・学習内容・学習方法などの観点から吟味し、ICTの効果的な活用について研究を進めてきている。

昨年度は本研究助成を受け、「問題を生み、言語活動を促すICTを活用した授業」というテーマを掲げ実践を積んできた。ICT活用のよさは、「写真や現物を大きく提示できる。」「映像で一連の動きを提示できる。」「プレゼンソフトを利用したグラフなどで、変化や量を具体的に提示できる。」など、子どもの五感に働きかけることができることである。したがって、ICTの活用は、子どもの追求意欲を引き出す「問題を生む場」で、有効な指導方法であることが明らかとなった。また、「問題を生む場」においては、生活経験や既習内容と対象との比較など、比較を通して違いを発見するようにすることが重要である。ICT活用のよさを、比較を通して問題を生む場を組織するための指導技術に取り込むことで、「意欲的な言語活動を促すICTを活用した授業」になるのである。

2. 研究の目的

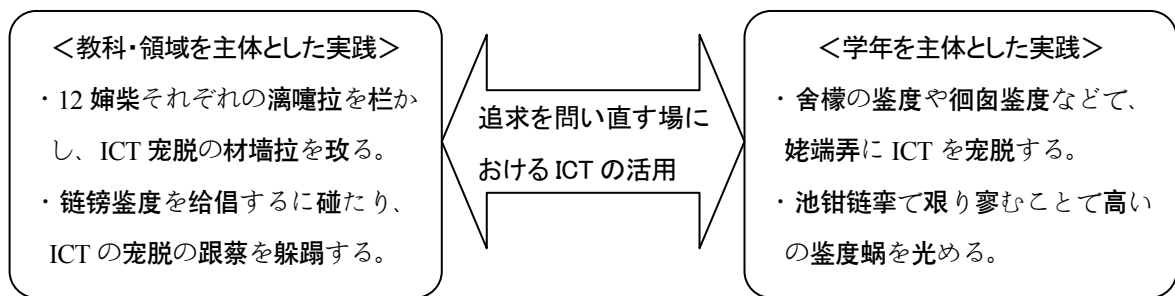
今年度は昨年度の研究成果を踏まえ、問題解決過程における「問い直しの場」に着眼し、子どもの追求を深めるためのICTの活用にかかわる研究に取り組んだ。子どもは問題解決に向け、生活経験や既習内容をもとに、その子なりの追求をしていく。その過程で、自分の追求とは違った視点に気付くことで、自分の問題解決を振り返ったり見つめ直したりする。新しい視点から自らの追求を吟味し、より確かなものへと追求を深めていくのである。とはいえ、子どもに委ねるだけでは高まりは期待できない。意図的に「問い直しの場」を組織することが大切である。そこで、子どものこれまでの追求に対し、新情報や教師の発問により新たな視点に気付かせる。問題解決の新たな可能性に目が向くようにするのである。その際、子どもの五感に訴えかけるICTの活用は、有効な指導技術となる。新たな追求の視点を含む写真や映像などの資料を視覚的に提示することで、子どもは自分の追求を問い直し深めていくことができると考える。

本研究では、「新たな視点から、子どもの追求を深める授業」において、どのように ICT を活用することが効果的な指導技術と成り得るかを、実践を通して明らかにすることを目的とした。

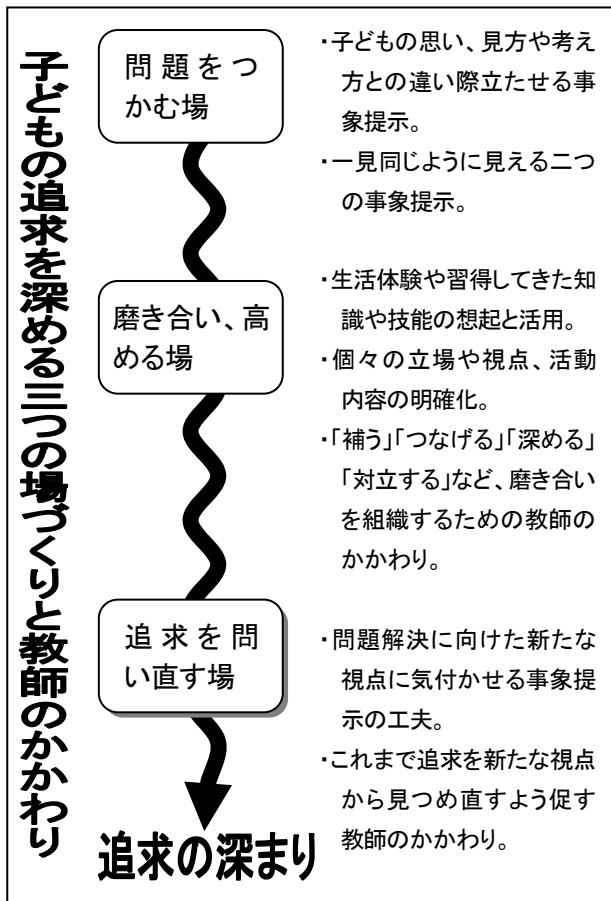
3. 研究の方法

教材研究により子どもの追求を深める視点を明らかにし、静止画・動画、実物投影機・プレゼンによる資料の加工など、ICT をどのように活用することが「追求を問い直す場」で有効なのかを吟味しながら実践に当たる。

本校の研究推進主体は、教科・領域を主体とする教科部会である。しかし、学級・学年を主体とした日々の実践がそのベースとなっている。したがって、本研究においても教科部会と学年部会を両輪とし、多くの実践を積むことで研究の成果と課題を明らかにしていく。



4. 研究の内容



(1) 子どもの追求を深める三つの場づくりと教師のかかわり

教材や他の子とのかかわりから、子どもの心をゆらし問題を生む。そして解決へ向けた子どもなりの追求の場を保障する。その上で、他者や教材にかかわる中で自分の追求を見直し、深める姿を目指す。そのために学習場面を三つに分け、それぞれのねらいを明確にした教師のかかわりを吟味する。

① 問題をつかむ場

「問題をつかむ場」において比較による違いの発見が、とても重要である。比較には、大きく分けて二つの型がある。一つ目は、生活経験や既習経験との比較である。子どもたちが既にもっている感じ方・見方や考え方をもとに、学習対象にかかわる中で違いを発見するようにすることで問題を生む。二つ目は、一見同じように見えるもの比較である。子どもにとって、同じものだと思っていなくても、それが二つあると自然に違い探しに向かっていく。

②磨き合い高める場

子どもは生活体験や既習経験を引き出したり、新情報を求めたりしながら追求していく。ここで表れる子どもの見方や考え方は多様である。そこで、板書や発問等で子どもの見方や考え方を立場や視点で類分けする。自分とは違う他の子の見方や考え方をきっかけに、より多面的に自分の追求を高めていく。

③追求を問い直す場

稿掲。

(2) 子どもの追求に対し、新たな視点を提示し、「追求を問い直す場」を構成する

昨年度の研究では、「問題をつかむ場」を中心に研究を進めてきた。今年度は、「追求を問い直す場」に焦点を当て、更なる研究の深化を目指してきた。

子どもたちは「磨き合い、高め合う場」を通し、他の子の見方や考え方に触れることで、追求をより多面的に高めていく。しかし、このような追求に子どもは満足しがちである。私たちは、安易な問題解決に満足するのではなく、常に妥当性を吟味しながら「本当の本当」を求める子どもの姿を目指す。そこで、「磨き合い、高め合い」による追求の成果を明らかにした上で、子どもの追求にはなかった対象の新たな視点に気付かせるような事象を提示する。子どもは、自分たちの追求の不十分さに気付き、新たな視点から問い直し、「修正しなければならないところは?」「付加しなければならないところは?」と、追求をより確かなものにしていくと考える。

(3) ICTの活用の教育効果を活かす

ICT活用のよさは、これまでの研究成果から次のようなことがいえる。

- ・写真や現物を大きく提示できる（じっくり観察）
- ・映像で一連の動きを提示できる（迫力・現実味・疑似体験）
- ・プレゼンソフトを利用したグラフなどで、変化や量を具体的に提示できる

つまり、子どもの五感に働きかけることができる

昨年度は、問題を生む場に焦点化し、子どもの心をゆさぶり、知的好奇心や挑戦意欲を喚起する研究に取り組んできた。その成果を生かし今年度は、「問い直す場」における子どもが追求を新たな視点から問い直すきっかけとなる事象提示に、ICTの教育効果を活かす。「新たな視点から、子どもの追求を深めるICTを活用した授業」を実践を通して明らかにしようと取り組んできた。

5. 実践より

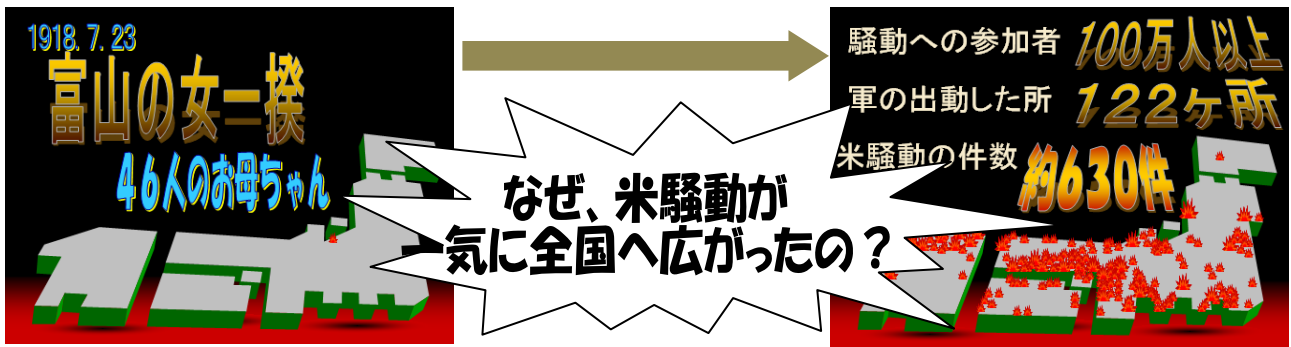
実践1… 社会科6年「米騒動」より

米騒動の意味を犯罪という視点から問い直すことで、時代の変化に目を向けるようにする。

子どもたちはこれまでの学習から、「我慢の限界を超えたら一揆が起こる」と、とらえている。米騒動においても、同じような側面がある。しかし、「新聞報道をきっかけに全国へ広がった」という事実は、「一揆」とは大きく異なる。同時に、歴史を学ぶ上で情報メディアという視点は重要である。そこで本単元では、新聞報道がもっていた社会的な意味を追求できるよう活動を構成する。そして、「なぜ、米騒動が一気に全国へ広がったのか」という問題を発見し、新聞報道を中核に、庶民の立場(苦しい生活・怒りの状況)や米屋・政府の立場(儲けるため・鎮めるため)を結びつけて考えることをねらった。

(1) 新聞紙とパワーポイントで問題を生む

「なぜ、米騒動が一気に全国へ広がったのか？」という問題を発見できるよう、米騒動にかかわる記事が載っている新聞(11日分)とその広がりパワーポイントで提示する。子どもたちは、日ごとに増える記事の様子と、富山県からあちこちに広がる米騒動の様子から、「日ごとに、米騒動が増えていくよ。」「女一揆から男一揆に変わっていくよ。」「どんどんいろんな地域に広がっていくよ。」など様々な発見とともに驚きの声を上げた。それを「なぜ、富山の女一揆が全国に広がったのか？」という学習問題に結びつけた。



(2) 追求の立場や視点から学び合いを組織する

子どもたちは、これまでの既習経験と教科書や資料集から新情報を見つけ、それをもとに追求を始めた。ここで現れる個々の見方や考え方は多様である。庶民の立場にこだわりのある子は、「違う地域でも苦しい生活していたはず。」「富山の母さんががんばったのだから。」などと、自分の考えを発表する。また、「米屋が値上がり期待して売り惜しみをするから」と儲けようとする米屋の立場や「騒動の広がりを恐れて、新聞報道を禁止したのは。」と騒動を押さえようとする政府の立場からも追求してくる。そして新聞により、各地の騒動の様子が報道されることが、さらなる騒動の引き金となり急速な広がり結びついたことにも目を向けていった。子どものもつ立場や視点を他の子に返していく中で、一人一人の見方や考え方を板書に位置づけていく。そうすることで、自分と他の子の違いを明確に意識し、自分とは異なる見方や考え方を受け入れながら、追求を深めていくことができたと考えた。

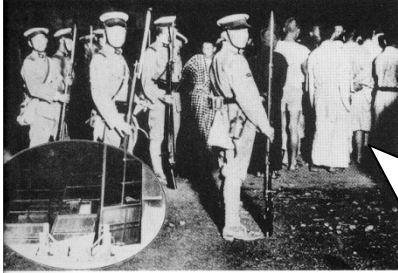


※PPと共に提示した当時の新聞



(3) 米騒動の結果（逮捕者など）から、追求を問い直す新たな追求意欲を喚起

子どもの追求は、庶民に寄り添ったものである。米屋の横暴に対する怒りによって、やむにやまれず女一揆を起こした人たちの思いを共感的にとらえているからである。しかし、一方では米騒動そのものは暴動・略奪の犯罪行為である。そこに気付いた時に、米騒動の意味を子どもたちはもう一度見直すと考えた。下記の写真を大型テレビに映し、米騒動の結果の資料を提示した。



※検査されている庶民の後姿

・警察に逮捕されているよ。
・よく考えたら、泥棒と同じかも。
・犯罪だから、仕方がないところも。

・騒動で、死んじゃった人もいるんだ。
・死刑になった人もいるなんて。
・騒動なんて起こさなかった方がよかったですか？

米騒動の結果！		
死者	30人以上	
逮捕者	2万5千人以上	
無期懲役	12人	
死刑	2人	

子どもたちに、米騒動は警察や軍隊によって鎮められ、多くの犠牲者を出してしまったことを知らせた。その上で、「米騒動を起こして、庶民に何かいいことはあったのか。」を問うた。子どもたちは、庶民に寄り添って追求してきただけに、米騒動を無意味なものにはしたくない。「不正な行為に対し、多くの庶民が立ち上がったこと」「これまでの一揆とは違う広がりを見せたこと」さらに、「米騒動をきっかけに内閣が総辞職したこと」などに目を向けた。この米騒動をきっかけに労働運動が広がるなど、民主化への大きなうねりにつながっていることを子どもたちなりにとらえることができた。

実践2…道徳5年「石井ちゃんとゆく！～まんが日本UD話～」より ユニバーサルデザインの意味をモノとひとの間から問い直す

本授業で扱った資料は、「石井ちゃんとゆく！」という「UD＝ユニバーサル・デザイン」のよさや必要性を伝えている、11年目を迎える札幌のテレビ番組である。約2分間の放送時間でありながら、端的にメッセージが伝わってくる内容や構成になっている。数多く放送された中で取り上げたのは「まんが日本UD話」である。通常、番組では製品や施設に注目して放送している。しかし、この話に限って「モノ」の工夫は一切無い。「人と人」との関係でもUDは成り立つことを昔の役場と住民とのやりとりを通し、紙芝居風に伝えている。つまり、UDにおいて必要なことは「モノ」や「人」にかかわらず、相手のことを考える「心のつながり」であり、番組を制作したディレクターの山田さんの思いである。子どもなりにその思いに迫ることを授業のねらいとしている。



(1) UD に込められた人々の知恵と思いを探る

前時、子どもたちに「石井ちゃんとゆく！」の「スロープのなぞ」にかかわる番組を視聴させた。普段スーパーなどでよく見かけるスロープ。それはユニバーサルデザインであることは知ってはいたが、設計者の様々な思いが隠されていることには目を向けていない。子どもたちは、坂の角度、スロープの長さに、車椅子でも利用しやすいようにと考えられた知

恵が隠されていたことに驚いていた。

(2) 「モノがないUD」を見せることで問題を生む

本時でまず、「スロープのなぞ」の視聴した学習を想起させ、「UDとモノ」の関係を確認した。その上で、「まんが日本UD話」を提示した。「スロープも自動ドアも作っていない」「役場の人が手を貸しているだけ」なのにUDとして取り上げられていることに焦点化し、「モノがないのに、なぜこの方法がUDになの？」という問題を生んだ。



ものがないのに、ユニバーサルデザイン？



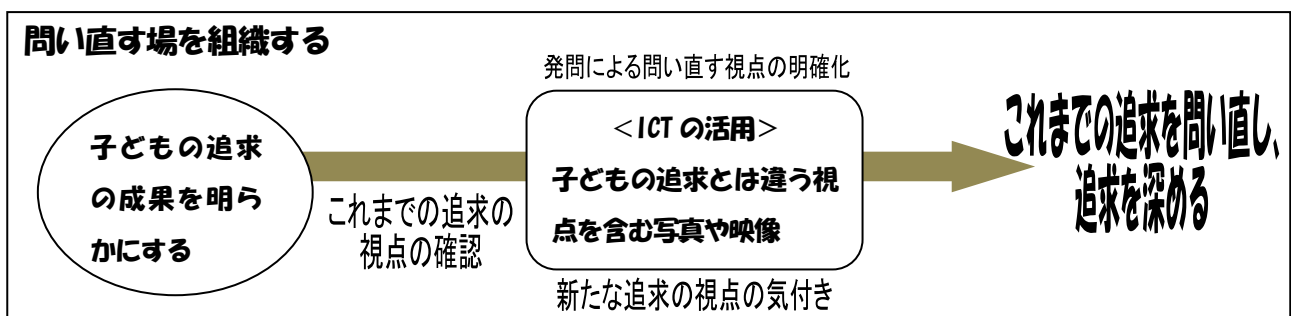
子どもたちはまず、「おばあさん」の立場から追求した。「手を貸してくれているからラクになっているよ。」「笑顔になっているってことは、行きやすいってことだよ。」といった便利さに目を向けた。一方、役場の人の立場からは、「ものがない分、体で便利さをつくっているんだよ」「来る人が笑顔だからうれしいんだよ。」「はじめは仕方なかったかもしれないけれど、喜んでもらえるとうれいを感じたんじゃないかな。」と、「心と心のつながり」に目を向けていった。子どもたちは、「モノがなくても心のあったかさでUDがつかれるんだ。」と追求の成果をまとめた。

(3) 「モノか心か」を問い直すことで、相手を思いやる心の価値へ追求を深める

「モノがなくても心のあったかさでUDがつかれるんだ。」という子どもに対し、「モノと心の関係」に追求を深められるよう問い直し場を組織する。自分たちの追求に満足している子どもたちに、前時で見た「スロープのなぞ」の番組を再度視聴させた。「人の温かい心があれば、このスロープは必要ないね。」と問うた。「温かい心さえあれば」という思いに浸っていたがゆえに、子どもはこれまでの追求を問い直し始めた。「いつも入口に、人がいるわけではないから、車椅子の人が困る。」と、助ける人がいない場合に着目する。さらに、「あのスロープにも、設計した人の温かい心と知恵があったよ。」「だから、モノも心も大切にしないとUDにならないのでは。」と、モノか心かという二者択一ではなく、両者の関係が大切であることに目を向けた。そして、「相手を思いやる心が核にあり、それがモノの工夫や人の心遣い・手助けとして表わしていくことが大切なのは…。」と、追求を深めることができた。子どもたちはこのような学習を通し、温かい心とそれを行動に表していくことの大切さを改めて感じていた。

6. 研究の成果と今後の課題

<研究の成果1…ICTと発問で、問い直し場を組織する>



子どもの磨き合い高め合う場での追求成果を明らかにする。その観点を大切に、ICTを活用して資料を提示する。子どもにとって比較の観点が明確であるが故に、これまでの自分たちの追求してきたことと、資料の意味するものの違いが発見できる。さらに、教師の発問で問い直しの視点を明らかにすることで、子どもはこれまでの追求を吟味し、より確かなものへと追求を深めることができる。

<研究の成果2…ICT 実践が広がる>

今年度、本校で平成23年7月1日(金)に第17回教育実践研究会を開催し、12本のICTの活用実践を公開した。昨年度の取り組みの成果として、ICT 実践集も併せて配付することができた。全道から300名を超える参加者が来校し、研究を深め広げることにつながったと考える。併せて今年度も、「ICT 実践集 vol2」を作成し、さらなる広がりに努めているところである。



《今後の課題…子どものICT 活用力の育成を》

本校ではこれまで大切な指導技術の一つとして、ICTの活用を研究してきた。しかし、情報化が進む中、子どものICT活用力を育てていくことも急務であると考えます。本校では子どもが使えるICT機器そのものが不足しているという現状ではあるが、可能な限り子ども自身がICTを活用する機会を作っていきたい。同時に、ICTの便利さだけでなく、使いこなす人の心の重要性についても、研究していく必要があると考えている。